二宮尊徳はどのくらいすぐれた人？―草野正辰の『手控』―

幕府の役人となってもなかなか仕事が与えられなかった尊徳をみて、中村藩江戸家老の草野正辰は尊徳がいかに有能であるかを、これまで行ったことや考え、さらに※周の臣（けらい）太公望にたとえて幕府に推薦しました。

手控（南相馬市原町区　佐藤重郎氏所蔵）

この『※手控』は、弘化４年（1847）４月、草野正辰が幕府に対して推薦したものの控えです。そこから正辰の尊徳に対する思いが感じられます。

草野正辰については

ここ見てね!! P35・56

初対面の正辰と尊徳との話（『手控』の一部）

●国を治めるには「仁（思いやり）」であること。
●すべて平等に恵むのではなく、貧しい人にはより多く恵むこと。
●いやなことは後回しにせず何事も一から順番に行うことが完成の早道であること。

報徳仕法コラム

太公望

古代中国の周（西周）王朝建国のときの功臣。名は呂尚。師尚父と尊称されます。姜子牙ともいいます。彼は、年老いたある日、川で釣をしていて、周の文王に会い、その才能を見いだされました。文王の父の太公（父または祖父の尊称）が望んでいたすぐれた人物だということで「太公望」と呼ばれたといいます。軍師として武王の殷王朝との戦いに力を尽くし，斉に領地をもらい、その始祖となりました。

その功績については、秦・漢王朝時代にすでに物語的となり、後世は小説の中では魔術師的能力を備えた軍師として活躍します。中国における軍師のはじめとされ、『六韜』と呼ばれる兵法書は彼によって編集されたものといわれています。

※周…古代中国の王朝の一つ　　※手控…予備として手もとにとっておくこと

『手控』の一部（現代語訳）

（金次郎が）幕府の御用のため天保 13 年（1842）に江戸へ出府したとき、私（草野）は初めて金次郎と会った。

そのとき金次郎は次のようなことを聞いてきた。「相馬様は６万石、収穫が約６万俵余りあり、これで政治や経済を行っているのか」と。「（そうです）６万俵で国を治めている」と答えた。すると、金次郎は「それは逆である。国を治めることは、とることは後にして恵むことを先に行うのが順番である。恵まれない民から年貢を受けるにはこの道しかない。聖人の教えにも国家を治めることは仁（思いやり）である。」

そして、「仁を行うことができるのか。」と問われた。「及ばないまでも行う気持ちはある。」と答えたが、「なかなかできることではない。」と言われ、さらに「その理由は、現在領内には４万人いると聞いている。１万両があってもそれを１人に１分ずつ恵むと、貧しい人にも同じ１分しかなく、この恵みをありがたいと思うか。」「貧しい人に恵むには１軒に 20 両か 30 両恵まなくては、聖人の仁ではない。」「仁というのは飢えているものに腹一杯になるまで食事をさせ、凍えるものには寒くないよう十分に着せてやり、住む家のないものには家を造って与える。衣食住を尽くすことにある。」「つまり、１万両あっても４万人では１人１分ずつにしかならない。また、30 両恵まなくてはならないものに、５両または 10 両恵んでも自分勝手に仁を行ったと思うだけで（実際は）仁を施したつもりでも不仁となる。気持ちの小さいものの仁である。」「しかし、１人に 20 両・30 両恵んでいたら、10 万両あっても行いがたい道理である。そうであればお手上げで聖人の仁は行われない。」

「さて、ここに一つ仁を行うことが可能な道（方法）がある。私はもと百姓（農民）である。荒れ地にひと鍬ぶっさすことがある。そうしてみると竹の根、草の根がしばり、鍬がなかなか動かない。ここより良いところがほかにあろうと思い、別のところへ鍬を入れる。ここも悪く、またここより良いところがあろうと移り、一から三、三から五、五から七と所々に場所を移す。人情すべてこれより良いところ、これより良いところと思い、先へばかり移って行くが、一生成就することはない。世間一般にはこの心得である。しかし、天道・天然の理は、根元のただ１か所からはじまれば、竹の根、草の根がしばっても左右前後よりも鍬を入れにくいところを先にやってしまう。つまり難地を起こすこれ唯一の方法である。この一より二と移り、三、四、五と移り、順に移ることが早道である。すなわち、１か村から 100 か村に及ぶことは至って速いであろう。このことから 170 か村を一気に恵むことは 100 万両あっても行いにくい。根元の唯一、つまりまず小からはじめる、１か村である。1,000 両恵んでも 2,000 両恵んでも、私は報徳金で恵むことが可能である。」と教示があった。

教示の通り一昨年（弘化２年・1845）11 月、金次郎は名代として富田久助（高慶）を派遣し、領地のうち成田村・坪田村（相馬市内）から仕法をはじめたところ、たちどころに領内中に※人気が進み、惰農であったものが勤農になった。つまり教示通りであった。

※金１両＝４分＝16 朱、１分＝４朱
※人気 ･･･ 人間の生気・活気。また人々が集まってつくり出す気配。世間一般の人の受けが良いこと。その社会・地方の人々の気風。

二宮尊徳はどのくらいすぐれた人？――内村鑑三著『代表的日本人』――

明治時代、キリスト教の宗教家・評論家として有名な内村鑑三は、海外に日本を紹介するために英文で本を書きました。それが『代表的日本人』です。彼は、日本人の代表者５人を選び、彼らを紹介することによって、わが国のことを理解してもらおうと考えました。この５人のうちの１人が二宮尊徳です。

鑑三は、尊徳を「農聖人」とし、農業にかかわるあらゆることにすぐれているばかりでなく、人々を導くために、まずみずからすすんで行ったことを高く評価しています。

内村鑑三

鑑三は、文久元年（1861）江戸に生まれ、明治・大正時代の最も有名なキリスト教の信者であるとともに、宗教家、評論家でもありました。彼は、明治 27 年（1894）『日本及び日本人』を英文であらわし、海外に向けて日本を紹介しました。明治 41 年に、この本を改訂、改題して出版したのが『代表的日本人』です。

「代表的日本人」として選ばれたのは、西郷隆盛・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮の５人です。

「農聖人」二宮尊徳

鑑三は数々の逸話を通して次のような理由から高い評価を与えています。

尊徳は事業を行うとき、「自然」はその法則に従う者に対して、豊かに報いるという簡単な原理のもとにたち、人々を救い勤労に導くために、最初にみずから献身的な「仁術」により実践したことです。

そして尊徳を「農聖人」、つまり農業にかかわるあらゆる知恵と徳行が最もすぐれ、あらゆるすべての人々が進んで、師とし手本とすべき人として絶賛しています。

なお、本の中で尊徳の事業が成功した事例として中村藩が紹介されています。

※西郷隆盛…明治維新の指導的政治家。　※上杉鷹山…江戸中期の出羽国米沢藩主。江戸名君の一人。
※中江藤樹…江戸前期の儒学者。日本陽明学の祖。　※ 日蓮…鎌倉時代の僧侶。日蓮宗の開祖。

逸話　根っ子掘りの老人の話

それは、老いて一人前の仕事のむずかしくなった、ある農夫の場合である。この老人は、いつも、木の根っ子掘りという――骨が折れて、しかも目立たぬ仕事に精出していた。他の者が休んでいるときでも、自分が選んだこの仕事をするのが、楽しくてならぬような様子で働いていたのである。彼は「根っ子掘り」と呼ばれて、村人の注意を引くこともなかったが、長官である尊徳のみは、彼に目を付けていた。そして、ある給料日、例によって、農民一人一人の仕事ぶりや受け持ちに応じて、長官の裁断の下される日に、最高の名誉と賞与とを受ける者として呼び出されたのは、ほかならぬ、この「根っ子掘り」であった。皆の驚きもさることながら、誰より驚いたのは、当の本人である。彼は、定まった給料以外に、金十五両を授けられることになった。農民の一日分の給料が、わずか二十銭であった当時としては、ほとんど考えられもせぬ大金である。老人は叫んで言った、

「旦那様、私は年寄りで、一人前のお給料さえ、もったいないほどの者でございます。私の仕上げた仕事は、人様に及びもつきません。旦那様は、おまちがえになっていらっしゃるのです。私は気がとがめて、とてもこのお金をいただくことはできません。」

「いや、そうではない」と、長官は、おごそかに答えた。

「おまえは、他の人が働きたがらない所で働いた。人が見ていようと、見ていまいと、ただ村のためになることだけを考えて、働いたのだ。おまえが根っ子を掘り出してくれたおかげで、邪魔物はなくなり、われわれの仕事は大いに助かった。おまえのような者に褒美をやらないで、これからさきの仕事を、どうして続けることができようか。この褒美は、おまえの正直の報いとして、天から授かったものだ。ありがたくお受けして、老いの身を養うために用いるがよい。おまえのような正直者に褒美をやることができて、私はこんなうれしいことはない。」

老人は子どものように泣き、「その袖は、涙にぬれて、しぼるほどであった。」※三つの村々は深く感動した。ここに、神のような者、すなわち、ひそかになされた善行を、明らかに報いる者が彼らの間に現れたのである。

※「三つの村々」とは現在の栃木県真岡市
※『明治文学全集 39　内村鑑三集』（昭和４２年　筑摩書房）より

二宮尊徳はどのくらいすぐれた人？―日本の近代化に与えた影響―

明治時代になると、これまで幕府や藩主導で行ってきた報徳仕法がすべて中止となりました。そこであらためて明治政府に継続を頼みますが、結局うまくいきませんでした。そのため、報徳社を結成し、民間で自主的に事業を進めることとなりました。

相馬地方では、興復社が組織されました。

報徳社

報徳社とは、報徳仕法にもとづく互助的な金融組織です。これまでの藩や幕府が主導で行ってきた報徳仕法に対して、民間で自主的に結社を結び行うもので、その地名を冠し「○○報徳社」といいました。※義捐金や加入金をもって資金とし、借入を望む者に貸付し、一定の年を限って毎年返済させます。そしてすべて返済の終わった翌年礼金として１年分と同金額を差し出させ、また資金としました。

大正13年（1924）、各地域にあった報徳社が大同団結し「大日本報徳社」が結成されました。

西郷隆盛像
（東京都台東区　上野恩賜公園内）

西郷隆盛と富田高慶

明治維新の立役者で政府の中心人物であった西郷隆盛は、当初から国内の窮民救済のことを考えており、その意味で報徳仕法にも関心があったようです。高慶は明治５年（1872）隆盛に面会し、旧中村藩で進めていた報徳仕法が磐前県に合併された後も継続できるよう、その支援を求めました。隆盛は賛同し政府に働きかけますが、結果的にはうまくいかず、県からの期待した支援は得られませんでした。

「敬天愛人」額（福島県立相馬高等学校所蔵）

天を敬い、人を愛するという意味です。西郷隆盛が好んでよく使った言葉で、尊徳の教えと似ています。

※義捐金…慈善・公益・災害救助などのために金品を寄付すること。

推譲の精神から信用組合の結成　…五常講

尊徳が服部家に奉公していたとき、使用人たちといっしょにお金を預かり、そのお金を貸す講「五常講」を結成しました。五常とは「仁義礼智信」のことで、儒教で人の常に守るべき五つの道徳をいいます。普通の金融システムと違うのは、推譲の心をもち余裕のあるお金を預け、借りたものは利子を払うのではなく、返済が終わったあとに、感謝し恩義に報いることから借りたお金とは別にお礼としてお金を差し出すという方法です。

こうしたシステムは報徳社の創立、さらに後に作られるわが国の信用組合の模範となりました。

今の「※共済組合」は報徳精神そのもの

尊徳によれば、領主と農民も一つのものの二つの側面にすぎないのである、というのです。領主も成り立ち、農民も成り立つ、それが分度というわけです。尊徳は弟子たちに、常に実践の中で教え続けました。現実は多様であるのだから、したがってやり方も多様であるというのです。

継承者たちは、「報徳運動」として実践し尊徳の思想を広めていきました。今も各地にある報徳運動は、尊徳の教えの実践であるわけです。

収入を上回る支出は必ず破綻する。そんなことを二宮尊徳は、今もわたしたちに伝えているのでしょうか。

信用組合…産業組合の一つ。中小の産業者の相互救済を目的とする金融機関。組合員に必要な資金を貸し付け、また貯金の便宜を得させることを目的とする社団法人。昭和18年（1943）市街地信用組合法による組合となり、昭和26年（1951）、信用金庫に移行。現在の「信用組合」は信用協同組合の通称名で別なものである。

二宮金次郎像にみる戦前教育

全国の小学校にあった二宮金次郎像は、『大学』という儒教の本を右手に持ち、薪を背負う少年時代の尊徳の姿をあらわしています。これは、富田高慶のあらわした『報徳記』にある少年時代の記述をかたちにしたものです。尊徳は明治37年（1904）国定の『尋常小学修身書』に登場して以来、昭和20年（1945）まで多くの教科書にのりました。

二宮金次郎像
（小田原市　報徳二宮神社境内）

勤倹・刻苦・精励を最大の美徳としていた当時、小学生に日本人としてとるべき道を教えるのにふさわしい人物として金次郎が取り上げられたのです。そして昭和３年（1928）昭和天皇即位御大礼記念として各地の小学校に銅像が寄贈されました。しかし、その多くが戦時中に供出されてしまいました。

※田﨑公司「二宮金次郎像に関する一考察」
（大阪商業大学商業史博物館紀要創刊号　平成13年）より

※共済組合…会社の従業員などで組織された組合で、組合員でお金を出し合い組合員が病気やケガ、死亡、退職など、困ったときそこから給付する。

二宮尊徳はどのくらいすぐれた人？―現代における評価―

日本では、バブル崩壊にともない経済再生が叫ばれてきました。その一つの方法として報徳仕法が再評価されています。

また、海外でも報徳仕法を評価する動きがあります。

報徳サミット

報徳仕法及び二宮尊徳とゆかりのある市町村（平成 28 年現在、17 市町村）の※首長があつまり、尊徳の考えや生き方を、現在のまちづくり、ひとづくりにどのように活かしていくか協力して取り組んでいこうとするもので、毎年加盟市町村持ち回りで開催されます。

第１回は昭和 63 年度（1988）小田原市で開催され、平成８年度（1996）第２回の掛川市からは毎年開催されています。

（平成 28 年度第 22 回は南相馬市で開催）

二宮金次郎像

加盟市町村一覧（17 市町村）

北 海 道：豊頃町
福 島 県：相馬市　南相馬市
　　大熊町　浪江町
　　飯舘村
茨 城 県：筑西市　桜川市
栃 木 県：日光市　真岡市
　　那須烏山市　茂木町
神奈川県：小田原市　秦野市
静 岡 県：掛川市　御殿場市
三 重 県：大台町

※平成 28 年８月 31 日現在

第 21 回　報徳サミットの様子（平成 27 年度　北海道中川郡豊頃町）

※首長…行政機関の長官。市町村では市長・町長・村長のこと。

尊徳の影響を受けた著名人

鈴木藤三郎　報徳仕法を製糖業において実践し、その発展に貢献した人物。尊徳の遺著を報徳全書として整理し、それを収容する土蔵とともに日光市の報徳二宮神社に寄進した。

御木本幸吉　真珠養殖を手がけ成功した人物。会社経営にも報徳精神を生かす。尊徳の生家が他人の手に渡っていることを知り、これを買い受けて元の位置に復元した。

豊田　佐吉　わが国繊維産業の発展に絶大な貢献をするとともに、トヨタ自動車などのトヨタグループの基盤を作った人物。彼の父が熱心な報徳信望者であったことからその感化を受け、報徳精神をもって経営にあたった。

松下幸之助　松下電器産業の創設者。零細企業を世界有数の家電メーカーに仕上げた人物で、その経営理念や経営手法は尊徳の思想や仕法に似ている。

その他の著名人

渋沢　栄一（わが国の資本主義の形成・発展に貢献。第一国立銀行の総監役、のちに頭取）
佐久間貞一（大日本印刷の前身である秀英社を創設。わが国最初の中小企業金融機関を新設。）
大江　市松（報徳精神を教育理念とする報徳学園中学校・高等学校の前身を創立。）
土光　敏夫（石川島播磨重工と東芝を再建。のち経団連会長・臨時行政調査会会長を歴任。）

※村松敬司「尊徳の影響を受けたビジネスモラリストたち」（長澤源夫編『二宮尊徳のすべて』（新人物往来社）所収）より

海外の評価

第二次世界大戦中、米軍（アメリカ軍）は日本国民に対する降伏勧告ビラに尊徳の教えやその姿を絵にするなどして利用しました。戦後、GHQ 民間情報教育局新聞課長の D･C･インボーデン少佐は発表した論文（『青年』昭和 24 年（1949）10 月号）のなかで二宮尊徳を「日本の生んだ最大の民主主義者」と賞賛し、この偉大な先覚者をもっていることは日本の民主主義的再建が可能であるとしました。また、文明評論家として名高いロバート・N・ベラーや元駐日大使エドウィン・ライシャワー、英国のサッチャー元首相、韓国の盧泰愚元大統領なども尊徳に対し高い評価を与えています。アメリカロサンゼルス市のリトル東京には二宮金次郎像があります。同時代に生き苦労して大成したなど似ている点が多いことから、尊徳のことを「日本のリンカーン」と評し紹介しているそうです。※

※長澤源夫「外国人からみた尊徳」（長澤源夫編『二宮尊徳のすべて』（新人物往来社）所収）より

最近では平成 14 年（2002）「国際二宮尊徳思想学会」が設立され、北京でシンポジウムが開催されるなど、近年めざましい経済成長をとげている中国でも、尊徳の教えに対し関心がもたれています。

さらに、中国では『二宮翁夜話』をはじめとした文献が中国語訳され続々と出版され、北京・大連・上海などに尊徳にまつわる研究センターが設立されるなど、国内において新たな広がりを見せています。ブラジルでは平成２０年（2008）日系人ブラジル移住１００周年記念事業として現地日系人から要望を受け「二宮金次郎像」が日本から寄贈されました。二宮金次郎を手がかりに、いま一度ルーツである日本文化を学ぼうとする動きが若い世代にも広がっています。※※

※※報徳博物館のご教示による